

## カリキュラム改変第一年目

### 一 燈臺の燈は消えた

早稲田大學第一文學部ではカリキュラムの大幅な改変にもなつて、一九九五年度から一、二年生にそれぞれ週四コマおかれていたフランス語・ドイツ語・ロシア語・中國語（これらの外國語は基本的に大學にはいつてはじめて學ばれるものである）の授業が、一年生一コマ減の三コマ、二年生二コマ減の二コマに變更されることになった。これは一九六六年に、外國語と國語の教育を重視するという當時の學部の方針のもと、あたらしいカリキュラムが制定されて以來の、外國語教育に對する大幅な改變であつた。もちろんこれ以前にも外國語のこま數を減らそうとする動きが皆無であつたというわけではなかつた。

大學に入るまえにすでに長年にわたつて學ばれている英語

カリキュラム改變第一年目（長谷川）

長谷川 良 一

については、あたらしいカリキュラム發足當時は、その他の外國語とおなじく一年生四コマ、二年生四コマで出發したが、その後、英文専修内部の事情やその他のいろいろの原因で、一コマ減り、また一コマ減りまた一コマ減りという具合になしくずしに減つていつて、このたびのカリキュラム改變以前にはすでに一年生二コマ、二年生二コマと、第二語學並みの授業時間數になつていた。また、その他の外國語についても、かなり以前から授業時間數が多すぎるという學生の不滿をよく耳にしていたし、外國語擔當以外の教員の間からもそれに類する聲があがつていた。このような學部の空氣を反映してか、第一文學部でもいく度か外國語委員會が作られて、フランス語・ドイツ語・ロシア語・中國語のこま數を減らすことが討議されて來た。わたしは中國語の代表者として、いずれの委員會にも參加したが、一貫してこま數を減らすべきでな

いことを強硬に主張してきた。わたしの考えでは外國語習得の第一段階の學習目標は、その外國語の發音と基本文型を習慣化といえるまでに徹底的に習得させることであり、すくなくとも中國語についていうならば、その習得には最低四こまが必要であることを、長年の教授経験から痛感していたからである。しかしわたしのような主張は多勢に無勢で、とくに一九八五年度に作られた外國語委員會のときなどは、他の授業時間数との關係から一年生、二年生それぞれ一こまずつ減らすことがほとんど決まりそうな勢にまでなった。そこでわたしは一、二年生を通じて、どうしても二こま減らさなければならぬことが絶対命題であるとするならば、せめて外國語の基礎をかためる大切な一年生のこま数をそのままにし、二年生のこま数を二こま減らすようにと提案した。外國語の發音と基本文型の習得という基礎さえしっかり身につけているならば、本當にやりたい學生にたいしては選擇の授業を受けるなり、語學教育研究所の語學講座を受講するなりなどの方法でいろいろ強化する方法があるからである。當時、わたしは委員會構成メンバーを説得するだけでは不安だったので、たまたま『文學研究科紀要』第三十一輯に、その年の夏北京でおこなわれた第一回中國語教育國際シンポジウム

の概要と、そのシンポジウムで發表したわたしの論文（中國語原文とその日本語譯）をのせてもらうことになっていた。その紙面を利用してわたしがなぜ一年生週四こまを固執するかという理由を書き、翌年の春に出版されるのでは間にあわないので、書きあげた原稿を夏休み中にコピーして第一、第二の兩文學部長および學部内で外國語教育問題で發言權のありそうな先生がたに配布してわたしの考えを知ってもらうことにした。この作戰が功を奏したのか、わたしの主張がほぼとおって、九月の主任會の段階では、學部當局から一年四こま、二年二こまにしたいという方向の提案がなされたが、その提案を各専修にもちかえて討論してもらった結果、十月の主任會では一部の専修の強硬な反對にあり、とりあえず來年度については從來どおり一、二年生四こまのまま、今後のことをどうするかについては、委員會をつくり根本的に討論して結論をだすということになったのである。

以上のようないきさつから今回のカリキュラムの全面改變にあたって、當然のことながら外國語のこま数が議題にのせられるであろうことはあらかじめ豫想されていた。しかし今回はわたしの退職も間近いことだし、たとえカリキュラムの改變が實施されるにしても、わたしの退職後のことである

うから、後進の人びとが將來の授業がやりやすいように、出来るだけ口出しすまいと心に決めていた。しかしカリキュラムの全面的改變の實施はわたしの豫想していたよりもはるかにはやく、一九九五年度からおこなわれることになり、わたしも最後の二年間は新カリキュラムで授業をおこなわなければならぬ破目になったのである。これは大變なことになったと、おくれればながら中國文學專修選出の委員を通じて關係當局に書面で意見を具申したが、すでに大勢はきまっていた如何ともすることができなかったのである。一九九六年度實施を目途に現在第二文學部のカリキュラムの全面的改變も計劃されているが、外國語のこま數の改變についてだけいえば、第二文學部新カリキュラムにおける週二こま半年一コースというのは啞然として議論外に置くにしても、すくなくとも第一文學部一年生週三こまへの改變は、目下國際化のすう勢のもと、ますます役に立つ外國語教育の重要さが叫ばれている情勢のなかでそれに逆行する外國語教育の後退であるといわざるを得ない。ぜひ關係諸先生がたの、できるだけ近い將來における再考をおねがひしたいものであるが、その再考に資する一助として、ここに前出の『文學研究紀要』第三十一輯にのせたわたしの意見を再録しておくことにする。

カリキュラム改變第一年度（長谷川）

（前略）なお現在、第一文學部では、一、二年生の語學Bを一こまずつへらすという動きがおこっており、わたしはそれに極力反對している。もしどうしても一、二年生をつうじて二こまへらさなければならぬというなら、せめて、一年生四こまをそのまま残し、二年生を二こまにすることを主張している。『中國文學研究第十期（一九八四年十二月）』の『基礎漢語課本「實驗補遺」』でも書いたように、早稻田大學第一文學部一年生の中國語の授業における、當面の最大の問題點は、一クラスの人數の多さである。もし一クラス四十名以下の状態が實現すれば、教學の能率が飛躍的にあがることは目にみえている。しかしそれは決して語學Bの一、二年のこま數を一つへらすことによって實現されない。その解決のひとつの提案を、わたしは上述の論文のなかでおこなっている。

わたしはクラスの人數が少なくなれば、どれだけ教學の能率があがるかの實驗として、たまたま早稻田大學法學部の第一語學の中國語のクラスが例年二十名前後だというので、わたしはすでに文學部で七こま授業を擔當しているが、二十名前後のクラスなら、またなにか新しい練習方法が模索できるのではなからうかと、法學部のK先生の切望

もあつて今年一年間だけ、週三こまのうち二こまをひきうけることにした。ところがふたをあけるとクラスの人員は四十名を突破していて、いささかあてがはずれたが、それでも急速にクラス全員の顔がおぼえられ、授業はスムーズに進行している。第一文學部では例年六十名ないし七十名のクラスを二クラス、それも一クラスそれぞれ三こまも教えているにもかかわらず、クラスの人數がおおいので、學年のおわりになつても、おや、こんな學生がクラスにいたのかと思うことがしばしばあるから、大きなちがいである。

ただ、法學部の第一外國語は週三こまなので發音と基本文法の部分にあたる『基礎漢語課本』前三冊を一年間であげることは無理である。週四こまあつて、はじめて前三冊をすっかりおえ、中國語の發音と基本文法の基礎がしっかりとたまるのである。發音と基本文法の基礎さえしっかりとおしえておけば、あとは學生本人の努力次第で、どんどん進歩するものである。たとえば、昨年の春から一年間早稲田大學文學部の中國語の授業だけうけて勉強したWクラスの一學生は、この春に北京語言學院の五週間の短期留學に参加し、午前は四時限、中國人の先生から授業をうけ、午

後は日本の學生とはつきあわず、もっぱら中國人學生、各國から來ている外國人留學生と中國語でつきあい、五週間の授業をおえると、一人で切符を買って母親と關係のある東北のある町まで旅行し、そこでその家庭に三日滞在し、北京にもどつてふたたび新疆のウルムチまでの切符を買い、車内で知りあつた中國の人から廣東人だといえと知恵をつけられ、ウルムチでは中國人しか泊れない招待所に廣東人だといつて宿泊し、それから蘭州に出、さらに飛行機で廣州まで飛び、香港經由で歸つてきたが、さすがに香港では廣東方言でわからず困つたものの、それ以外は全然不自由をしなかつたという。これも第一文學部一年の中國語の授業が週四こまあるから可能なのである。日本の一般の大學では、中國語はほとんど週二こまの第二外國語のわく内で教えられるっており、早稲田大學文學部は週四こまの全國唯一の學部であり、ほかの大學の先生からはとてもうらやましがられている。

第一文學部の一、二年生の語學Bのこま數をどうするかということは、この九月に最終的に決定される筈であるが、もしわたしの主張する一年生四こま、二年生二こまが實現せず、一年、二年生それぞれ三こまということになれば

ば、全國唯一の希望の燈臺の燈が消えることになる。のみならず、このたびのシンポジウムでわたしの授業方法に興味を示してくれた世界の代表が、將來早稲田大學を訪問されて、わたしの一年生の授業を見學したいと申し出られたら、わたしはその先生たちにどのように説明したらよいのだろう。ぜひ關係方面の再考をのそみたいものである(傍點はこの度つけた)。(一九八五・八・三〇)

## 一一 わたしに課せられた課題

一の部分で、このたびのカリキュラムの改變にともなつて中國語一年生の授業については全國唯一の希望の燈臺の燈は消えたと書いたものの、それでは現實に残された問題にどのように對處するか。わたしのこれからの在職二年間にはすくとも絶対に改變されそうにもない週三こまの枠組みのなかで、いままで同様、中國語の入門教育をどのように効果的にこなうか。これがわたしに課せられた課題となった。

週四こまから三こまへのこま減という、どうしてものがれることのできない時間的な不利な條件はあるにしても、今回のカリキュラム改變後でも有利な點が皆無というわけではなかった。その第一の點はクラスの人數が最大四十名と限定さ

れたことである。北京語言學院のように一クラス十名乃至十五名ということは望むべくはないにしても、過去において一クラス七十名をこえる年がざらにあり、近年でも常に五十名をこえていた状態のことを考えれば、授業の効率化の點で有利な條件である。このことは一のところでも引用した早稲田大學法學部第一語學の授業の例からでも明らかである。

第二の點は、これは中國文學專修内の同僚のわたしにたいする配慮からであるが、はじめて年間を通じて一人の教師による一クラス三こまの授業が實現したことである。いままで週四こまの授業がおこなわれていた頃、二人の教師による二こまづつおこなわれる授業よりも、三こまと一こまの授業のほうが、さらには一人の教師による四こまの授業の方が教授能力があがることを實際の授業の實感から何度かのべたことがあるが(「ひとつの補足」一六七六年、『基礎漢語課本』實驗補遺)一九八四年、いずれも『中國語入門教授法』東方書店一九九五年に收録、一人の教師で一クラス三こまの授業をすべてまかせられるということとは、前出の法學部第一語學の授業のときとはちがつて、二人の教師の擔當からおこる授業の無駄を極力さけることが出來ると豫想された。

一の部分ですでにのべたように外國語習得の第一段階の學

習目標は、その外國語の發音と基本文型を習慣化といえるまでに徹底的に習得させることであるが、その目標は發音と基本文型を基本的に網羅した『新中國語』（原名『基礎漢語課本』）前三冊五十八課を完全にマスターすることによって達せられる。したがって一九八二年『新中國語』を教材として使用しはじめて以來、このたびのカリキュラム改變までの十數年間、一年生の最低のノルマとして前三冊を完全にあげることにおいていた。年度によって進度に若干相違はあったが基本的には十一月半ばには全五十八課を學びおえ、第二年度の授業への準備のために、別の教材を用意して辭書に習熟させる訓練をおこなったこともあるし、一九八七年に『新中國語』と語彙や基本文型において基本的に一致するビデオ教材『初級漢語課本』（北京語言學院作成）を入手してからは、二學期の一こまを利用して、このビデオを活用しノーマル・スピードで話される中國語を聞き取る訓練をおこなうこともできた。新しいカリキュラムの一こま減の週三こまでは、週四こま時代のすべての訓練を網羅することは望むべくもないが、出来ることならば、すでにのべた二つの有利な條件を利用して、最低の目標である、『新中國語』前三冊だけは完全にあげようと考えた。

手元に残っていた過去の記録をひっくりかえしてみると、一學期終了時點での進度は、四月十日前後からはじまつていた八九年度が三十九課、九〇年度が三十九課、九一年度が四十課、始業時が四月十五日前後に改められた九二年度が三十八課、九三年度が三十六課、九四年度三十八課となっていた。一九九五年度ではカレンダーで計算してみると五月下旬の土曜日を早慶戦で一回休講するとして三十四回授業が出来ることがわかったので、もし基本的に一回一課の速度で授業をすすめるとすればどうやら第一學期の目標は達成されそうである。

### 三 『新中國語』前三冊は教え終えられたか

週四こま時代、わたしが擔當した授業に限っていうならば夏休みまでの授業のなかで、一時限の範囲内で教えきれなかった課に、程度補語をとりあつた第二十五課、能願動詞をとりあつた第二十八課などがあったので、出来ることならば、これらの課もいろいろと工夫することによって一時限内で教えおわろうと決めたが、結果として七月の一學期の終了時點では三十四回の授業時間で第三十一課まで終えることができた。最終日の七月十日には『新中國語』をすす

ることなく、例年學生に見せている朝日出版制作の北京紹介ビデオ『こんにちは北京』の前五巻をまとめて見せたので、もしこの日も教科書をすすめておれば第三十二課までゆけた筈である。もちろん例年實施している夏休みまでの三回の聴覺テストも實施できたことはいうまでもない。第一回のテストは五月二十五日に實施したが、その日の授業ではテストとその自己採點をおえたのち、第一單元の復習課である第十四課をもかなりの練習問題をもふくめて終えることができた。第二回の聴覺テストは六月十五日で、第一回のテストの時と同様、テストをおえて第三單元の復習課である第二十二課をかかなりの練習問題をもふくめて終えることができた。第三回の聴覺テストは夏休みが近づいていたので、第一、二回のときのように單元の復習課にあわせて實施することができず、六月二十九日の能願動詞をあつかった第二十八課のとき實施したが、テストと自己採點を終えたあとの授業では練習問題の部分がまるまる残ったので、つぎの七月一日の授業で第二十八課の練習問題と第二十九課の一部、七月三日の授業では第二十九課ののこりと、その單元の復習課である第三十課をおえることができた。

例年の三回の聴覺テストの結果では、意味の對立をもたら

カリキュラム改變第一年目（長谷川）

す聲母、韻母の對立點の聞き分けよりも聲調の聞き分けの方が成績がよくなかったので、この點を強化するため、今年は平素の授業でも聲調の聞き分けに重點を置いたが、その結果として第三回の聴覺テストでは聲調の聞き分けの成績は例年にくらべて抜群であつたが、その反面、聲母、韻母の對立點の聞き分けの方の成績は例年ほどではなかった。この點をおぎなうため夏休みに聲母、韻母の對立點の聞き分けを宿題に出したが、學生諸君が努力してくれたおかげか、夏休み明けの最初の授業のとき再び實施したテストでは例年の程度までには成績があがつていた。來年度は聲母、韻母の對立の聞き分けの訓練にもはじめから留意しなければならないだろう。

第二學期の中國語の授業時間數は、創立記念日、體育祭、秋の早慶戦、早稻田祭などの學内行事で、春の早慶戦で一度だけ抜ける第一學期にくらべて例年かなりすくなかったが、とくに今年の十月の土曜日の抜け方はすざましかった。十四日は日本中國語學會で、二十一日は創立記念日で、二十八日は早慶戦でぬけ、授業ができたのは七日の一回だけだった。したがって二十六日（木）の體育祭をふくめて十三回の授業のうち四回までが抜けることになった。このほかわたしの個人的事情であつたが朝日新聞主催の中國語辯論大會の審査員

## 中國文學研究 第二十一期

を引き受けていたので、十一月十一日（土）の第一次書類審査の當日は理由を申し出て午後の審査を午前になわしてもらったが、十二月九日（土）の午後におこなわれた辯論大會當日にはどうしても一回休講せざるを得なかった。こうしてまだおこなわれていない年明けの三回の授業をもふくめて第二學期の授業数は三十三回ということになった。

『新中國語』全五十八課の後半は一課の分量も多くなり、内容も複雑になってくるので、第一學期のように基本的に一課を一回の授業でおえることのできないことは、例年の授業経験からわかっていた。以下記録にもとづき九月以降の進度を示せばつぎのようである。

9月16日、土、期末テストの正解、聴覺テストの再實施、

第三十二課の新出單語。

9月18日、月、第三十二課、第三十三課の新出單語。

9月21日、木、第三十三課、練習問題3は宿題に出して提出させる。

9月25日、月、第三十四課。

9月28日、木、第三十五課の新出單語、文法、いれかえ練習、本文。

9月30日、土、第三十五課の練習問題、第三十六課の新出

單語、文法。

10月2日、月、第三十六課、第三十七課の新出單語、文法、いれかえ練習。

10月5日、木、第三十七課。

10月7日、土、第三十八課、第三十九課の新出單語、文法。

10月9日、月、第三十九課。

10月12日、木、第四十課。

10月16日、月、第四十一課、繪による練習はつぎの時間にまわす。

10月19日、木、第四十二課。

10月23日、月、第四十三課、練習問題4以下は宿題にまわし自習させる。

10月30日、月、第四十四課。

11月9日、木、第四十五課練習問題2まで。

11月11日、土、前課の練習問題をおえて第四十六課。

11月13日、月、第四十七課の新出單語、文法、いれかえ練習、本文。

11月16日、木、第四十七課の練習問題、第四十八課の新出單語、文法、いれかえ練習。

11月18日、土、第四十八課、第四十九課の新出單語。



11月20日、月、第四十九課。

11月25日、土、第五十課。

11月27日、月、第五十一課。

11月30日、木、第五十二課の練習3まで。

12月2日、土、前課の練習をおえて第五十三課の本文まで。

12月4日、月、前課の練習問題をおえて第五十四課の練習まで。

12月7日、木、前課の練習問題をおえて第五十五課の本文の途中で。

12月10日、月、第五十五課の練習問題をおえて第五十六課の新出單語まで。

12月14日、木、第五十六課ののこり。

12月16日、土、第五十七課の新出單語、歌劇白毛女の選曲の鑑賞、第一回聞き取りテスト。

したがって年明けの三回のうち二回を利用して第五十七課と第五十八課をやれば、最後の文法復習提綱の部分は残ることになるが、基本的に『新中國語』全五十八課を教えおえたことになる。第二學期は『新中國語』を極力進めるために、學生にビデオを見せる餘裕がもてなかったたので、その穴埋めとして、最後の授業の時間を利用して、七月に見せた『こん

にちは北京』の後半の第六巻から第十巻までを見せるか、すこし前、白毛女の音楽を鑑賞したので、それと比較する意味で京劇のビデオを見せるかのどちらかにしようと思っている。

#### 四 むすびにかえて

以上で今年度の授業のあらましの報告をおわりますが、いままでの年の授業にくらべて特徴的なことが二点ある。その第一の点はいままでの年にくらべて、出席者の数が兩極端に分れたということである。今年は二十七クラスと三十二クラスの二クラスを擔當したが、年末までの合計六十二回の授業のうち、二十七クラスでは在席三十八名のうち、全出席六名をふくめて缺席五回以内のものが二十一名もいた反面、缺席二十回以上のものが六名もいたし、三十二クラスでも在席三十八名のうち全出席五名をふくめて缺席五回以内のものが十四名もいた反面、缺席二十回以上のものが八名もいた。いままでの年の統計はいま手元がないが、わたしの感じではこのように出席者が兩極端に分かれたことはなかったように思う。とくに三十二クラスの方は缺席者がひどかった。その原因ははっきりしないが、ひょっとすると週三こまといふこま数の減少にわたし自身が緊張して精神的に餘裕がなく、密度の濃い

授業をやり、學生にたいする要求が例年よりきびしすぎ、一部の學生はそれについてこれなかったのかも知れない。もしそうであったとすればこの點は反省しなければならぬ。

第二の點は年末に實施した聞き取りの第一回テスト(その方法は「L1教室を組み入れた中國語入門教育第一年目」一九八八年、前出書所載)では、平素出席のよかった學生はもちろんのこと、あまり出席のよくなかった學生でも、いままでの年なみのかなりのよい成績をあげたということである。これは意外な結果であった。

今年は時間の關係からいままでのように第二學期の一こまを利用してビデオ『初級漢語課本』を利用して、ノーマルで發話される中國語の聞き取りの練習をしなかったにもかかわらず(その練習方法は「L1教室を組み入れた中國語入門教育第二年目」前出書所收)、二十七クラスでは十八題のうち正解十七題のものが四名、十六題のものが五名、十五題のものが一名、十四題のものが四名、十三題のものが三名と、正確率七十二%以上のものが三十八名中十七名いたし、三十二クラスでも満點のものが一名、十七題のものが一名、十六題のものが四名、十五題のものが三名、十四題のものが三名、十三題のものが三名と、正確率七十二%以上のものが三十八

名中十五名いた。さらに第二學期に出席のあまりよくなかったもののなかにも正確率五十六%以上のものがかなりいたのである。このことは授業に出てこないことがかならずしも中國語の學習を放棄したものでないことを物語るものであるが、今年の學生に聞き取りの力がかなりついたことは、授業中でも出来るだけ機會をつかんで、教科書を利用して聞き取る練習をさせることに努めたが、教室外においても書かれたものにたよることなくテープだけでその意味を取る練習を極力奨励したことも効を奏した結果かも知れない。

こうして今年度は週三こまであったにもかかわらず、基本的に『新中國語』全五十八課を終えることができたが、これはいつにかかって一クラスを一人の教師で擔當できたということとは無縁ではない。もし二人乃至三人の教師で一クラスを教えなければならなかったとすればこのことは不可能なことである。いまの早稻田大學第一文學部中國文學專修の條件では、わたしのような幸運なことは例外であつて、所般の事情からどうしても二人、極端な場合は三人で擔當せざるを得ない。そのためにも出来るだけ近い將來に一年生週四こまの授業をぜひ復活させてもらいたいものである。